

第8次栽培漁業基本計画（素案）の概要（R4～8年度）

参考資料(1)

1 策定の目的

本道の沿岸漁業生産量の7割を占める栽培漁業を計画的に推進するため、国の「第8次栽培漁業基本方針」を踏まえ、「第8次栽培漁業基本計画」を策定するもので、次期計画では、新たに養殖の取組や、水温上昇・赤潮の発生など海洋環境の変化に対応した取組を加えています。

2 水産動物の種苗生産・放流などに関する指針

- 栽培漁業による資源造成の取組の一層の推進
- 海域の特性に応じた栽培漁業の取組強化（赤潮への対応含む）
- 栽培漁業の広域的な展開促進
- 生物多様性等の保全への配慮
- 栽培漁業に関する道民の理解の醸成と普及

3 栽培漁業の基本的な考え方

- ・ 受益者負担に基づく種苗放流と資源管理を通じて、対象となる漁業資源を持続的に利用することを目標として、6段階（A～F）の技術段階を魚種毎に設定し、技術の向上を図ります。
- ・ 試験研究機関等が種苗生産や放流に関する技術を開発した魚種は、漁業者等が事業化への移行を検討します。

目標とする技術段階（種苗放流）

A：新技術開発期	・ 基礎的な種苗生産技術を開発
B：量産技術開発期	・ 種苗の量産技術を開発
C：放流技術開発期	・ 効果的な放流手法を検討
D：事業化検討期	・ 資源量に応じた放流数量の検討 ・ 受益の範囲や規模の把握
E：事業化実証期	・ 種苗の生産～放流の体制整備 ・ 放流効果の検証、経費負担検討
F：事業実施期	・ 持続的な栽培漁業の成立

4 技術開発に関する事項

- 地域の要望が強く、事業化の可能性のある以下の魚種を「技術開発推進種」に設定し、種苗放流や養殖業の実施に必要な種苗の量産技術を開発していきます。

魚種名	段階	課題
シシャモ	B	・ 大型種苗の量産技術
アカガイ類	A	・ 親貝の飼育～採卵技術
エゾイシカゲガイ	A	・ 幼生～稚貝の飼育技術

- ※上記のほか、赤潮で被害を受けた太平洋のツブ類や資源が減少しているオホーツク海のケガニについて、地域と連携して種苗生産技術の開発や普及に取り組みます。



5 種苗放流事業の現状および今後の目標

（単位：千尾(個)）

- 種苗放流を計画的に推進するため、技術開発の進捗や地域の意向等を踏まえ、魚種毎に放流数や技術段階の目標を設定しています。

- ・ エゾバフンウニは赤潮被害からの回復を図るため、道東地域での需要が増加しており、供給先の確保に努めることとしています。
- ・ マナマコは市場価値の高まりを受け、種苗放流の取組が盛んになっていることから放流目標が増加しており、事業化に向けた検討を進めてまいります。

魚種名	種苗放流数および技術段階			
	現状(R2)		目標(R8)	
ヒラメ	2,200	E	1,320	F
マツカワ	1,000	E	1,000	F
ニシン(日本海北部)	2,000	F	2,000	-
ニシン(日本海南部)	500	C	1,400	D
ニシン(湖沼性)	2,000	E	2,400	F
キツネメバル	400	C	(削除)	
ホタテガイ	3,170,000	F	3,562,500	-
エゾアワビ	650	F	1,000	-
エゾバフンウニ	43,400	F	54,647	-
キタムラサキウニ	3,100	F	1,980	-
マナマコ	4,000	C	12,600	D

※事業化済みの魚種は目標段階を「-」としています。

6 第8次計画における新たな取組

- これまで放流用種苗生産のために開発してきた親魚の養成や種苗生産、疾病予防などの技術を活用して、養殖用の種苗生産技術開発や、養殖用に生産した種苗の育成技術開発に取り組みます。

養殖推進種（新設）

魚種名	目標(R8)
アサリ	C'
バカガイ	
イワガキ	
マナマコ	D'
サケ・マス類	
ムール貝	
ホタテガイ	F'
エゾアワビ	
マガキ	
エゾバフンウニ	F'
キタムラサキウニ	
コンブ類	

目標とする技術段階（養殖）

A：新技術開発期	} 放流推進種と同様
B：量産技術開発期	
C'：養殖技術開発期	・ 基礎的な育成技術を開発
D'：養殖実証期	・ 養殖技術の普及、取組体制整備 ・ 地域と連携し事業化手法を検討
E'：事業化実証期	・ バリューチェーンの構築 ・ 付加価値向上や経費削減の実証
F'：事業実施期	・ 持続的な養殖業が実施される

- ※マナマコについては、これまで取り組んできた種苗放流と併行して、養殖の事業化に向けた技術開発も推進します。